

平成27年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成27年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 キアンコウ

学名 *Lophius litolus*

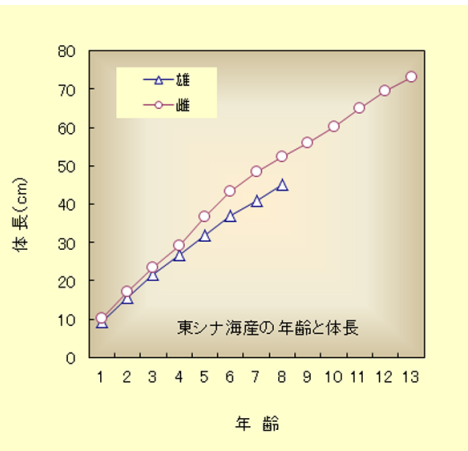
系群名 太平洋北部

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命： 不明
 成熟開始年齢： 不明
 産卵期・産卵場： 4～6月（津軽海峡東部沿岸）、5～7月（仙台湾周辺）、4～8月（福島県中部海域）
 索餌期・索餌場： 周年、青森県～千葉県沿岸の水深30～400mの大陸棚から陸棚斜面 津軽海峡東部沿岸域と福島県沿岸域においては、通常水深100m前後に分布
 食性： 青森県沿岸では、魚類、頭足類 福島県沖では、サラサガジ、エゾイソイナメ、カレイ類、タラ類、イカナゴ、ギンアナゴ、カタクチイワシなど
 捕食者： 若齢個体の捕食者はミズウオ

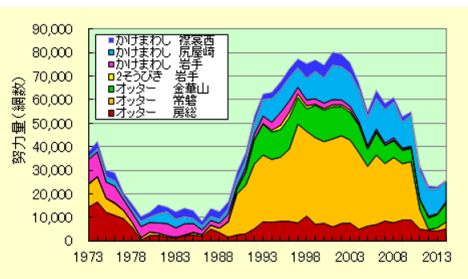
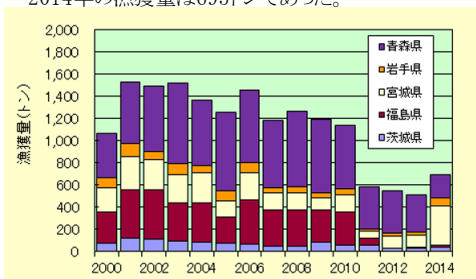


漁業の特徴

沖合底びき網漁業(沖底)、小型底びき網漁業(小底)を主体に、底刺網漁業や定置網漁業でも漁獲されている。青森県から茨城県の全県で漁業種別別にキアンコウの漁獲量が把握できるのは2000年以降である。2014年は全体の漁獲量のうち、沖底、小底、その他漁業種(刺網、定置網など)の占める割合がそれぞれ45%、16%、39%と、沖底の割合が最も高い。

漁獲の動向

漁獲量は、2000～2010年の間、1,100～1,500トンであったが、近年は減少傾向にある。特に、2011年以降は東日本大震災の影響で福島県の操業(2013年から試験操業を実施)がほぼ休止状態にあり、漁獲量は大きく減少した。2014年の漁獲量は695トンであった。



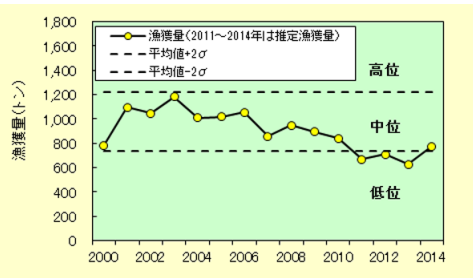
資源評価法

震災の影響を大きく受けている福島県を除く、青森県から茨城県の2000年以降の漁業種別別漁獲量(2011年以降は震災の影響を考慮して稼働率で除することによって引き延ばした推定漁獲量)から資源状態を判断した。

資源状態

震災前の2010年の漁獲量を1として年別別別漁業種別別に稼働率を推定し、2011年以降の漁獲量を稼働率で除することによって、2011年以降の推定漁獲量を得た。資源水準は2000～2010年の福島県以外の全漁業種合計漁獲量の平均値+2σである1,218トンを高位と中位の境界、平均値-2σである734トンを中位と低位の境界として設定した(σは標準偏差)。2014年の福島県以外の推定漁獲量は774トンであったことから、資源水準は中位、2010年の漁獲量および2011～2014年の推定漁獲量を合わせた5年分の推移から、動向は減少と判断した。





管理方策

資源水準が中位、動向が減少であることから、資源量を増加させることを管理目標として2016年ABCを算定した。

管理基準	Limit/Target	F値	漁獲割合 (%)	2016年ABC (トン)
0.9・Ct・1.02	Limit	-	-	990
	Target	-	-	790

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量
- ABC算定規則(2-2)により、 $ABC_{limit} = \delta_2 \cdot Ct \cdot \gamma_2$ 、 $ABC_{target} = ABC_{limit} \cdot \alpha$ で計算した
- δ_2 には推奨値の0.9、 α には標準値0.8を用いた
- γ_2 (1.02)は、 $\gamma_2 = 1 + k(b/l)$ で計算した。kは標準値の0.5、bとlは福島県を除いた直近3年間(2012～2014年)の推定漁獲量の傾きと平均値
- Ctは東日本大震災の影響を考慮して、福島県以外の2014年の各県漁業種別漁獲量を県別漁業種別稼働率で引き延ばした値に、福島県の2008～2010年の平均漁獲量を加えた値とした

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は減少
- 震災による影響を受け、2011年以降、漁獲量と努力量が大きく減少している

管理方策のまとめ

- 資源量を増加させることを管理目標としてABCを算定した

執筆者：柴田泰宙・服部 努・成松庸二

資源評価は毎年更新されます。